福岡県立大学人間社会学部紀要
2023, Vol. 32, No. 1, 65－72

研究ノート

青年期前期・中期における学習習慣と社会情緒的コンピテンス、メタ認知の関連

小　林　亮　太*・小　田　真　実**・岩　佐　康　弘***・則　武　良　英****

要旨　生徒の学習習慣にはどのような要因が関わるのだろうか。本研究ではこの点について社会情緒的コンピテンスやメタ認知に焦点を当て検討を行った。中学生と高校生237名を対象に質問紙調査を実施した。相関分析の結果、社会情緒的コンピテンス、およびメタ認知と学習習慣の間に正の関連が認められた。一方で階層的重回帰分析の結果、社会情緒的コンピテンスとメタ認知から学習習慣への交互作用は有意ではなかったことから、生徒の学習習慣を高めるためには社会情緒的コンピテンスとメタ認知それぞれが重要であることが示された。また、社会情緒的コンピテンスやメタ認知の発達的差異を検討するために、学年間比較を実施した。その結果、基本的に学年間で有意な差は認められず、生徒における社会情緒的コンピテンスやメタ認知の発達的な変化は大きくはない可能性が示された。

Key Words　社会情緒的コンピテンス、メタ認知、学習習慣、認知発達、中学生、高校生

目的

学習習慣とは児童や生徒が学校、および家庭で行う日常的、習慣的な学習行動であり（遠藤・中谷、2017）、学業成績や学校適応などを考える上で重要な要因だと考えられる。たとえば、杉村（1988）では、児童において学習習慣が身についている者ほど各教科の成績に優れること、そうした傾向が高学年においてより強く認められることが報告されている。しかしこうした重要性に対して、大学生においても約3割が基本的な学習習慣を身につけられていない可能性も報告されている（Benesse教育研究開発センター、2014）。そのため、学習習慣の促進や維持に関わる要因を見出し、介入や訓練方法を考案していくことが必要だと考えられる。では、学習習慣の形成や維持にはどういった要因が関わるのだろうか。本研究ではこの点に関し

＊福岡県立大学人間社会学部・講師
＊＊広島大学教育学研究科博士課程後期
＊＊＊東京電機大学理工学部・准教授
＊＊＊＊川崎医療福祉大学医療福祉学部・助教

て、社会情緒的コンピテンスとメタ認知に焦点を当てる。

社会情緒的コンピテンスとは、自分と他者、集団との関係に関する社会的適応、及び心身の健康、成長につながる行動や態度、そしてまた、それらを可能ならしめる心理的特質のことである（遠藤、2017）。社会情緒的コンピテンスについては様々な区分が提案されており、たとえば、社会情緒的コンピテンスの学習プログラムの1つであるSocial and Emotional Learning of 8 abilities at Schoolでは、基礎的社会的能力と応用的社会的能力に大別される。そして基礎的社会的能力についてはさらに５つの下位区分（自己への気づき、他者への気づき、自己のコントロール、対人関係、責任ある意思決定）がなされている（小泉、2011）。自己への気づきは自身の感情や能力を適切に認識したり、評価したりする能力である。他者への気づきは他者の感情を正確に認識するとともに、他者の視点で考える能力である。自己のコントロールは目標達成のために情動や行動を調整する能力を意味する。対人関係は、他者と関わる過程で生じる情動を適切に調整し、良好な関係を構築したり、維持したりする能力である。責任ある意思決定はその選択肢を選ぶことに伴う結果の良い側面も悪い側面も理解した上で、適切な決定を行う能力を指す。学習への取り組みやその継続には興味や不安などの多種多様な情動や友人関係が関わることを踏まえると、社会情緒的コンピテンス、特に自己への気づきや自己へのコントロール、対人関係は学習習慣を促進しうると考えられる。

メタ認知とは、認知についての認知であり、自分の思考や行動をモニタリングし、その誤りに気づいたり、適切な方略を選択したりすることである（三宮、2008）。メタ認知は様々な活動に関わっており、学習を遂行する上でも重要である。たとえば、計算問題を解く過程をメタ認知により適切にモニタリングすることができれば、誤った計算手続きの実行の失敗に気づくことができ、誤答を減らすことができる（岡本，2008）。このようにメタ認知は直接的に学習活動を支えること、あるいは学習活動が適切に遂行されたことによって学習への期待や自信が高まることを介して、学習習慣の促進や維持に関わっていると考えられる（浅村、2020；上淵、2008）。

本研究では中学生と高校生を対象に横断調査を実施し、学習習慣、および社会情緒的コンピテンスとメタ認知の関係性について検討する。上述のように学習習慣と社会情緒的コンピテンス、メタ認知の間には正の関連が予測される。本研究ではまず、こうした関連が認められるか検証を行う（目的１）。一方で、メタ認知と社会情緒的コンピテンスのいずれかが高いだけでは不十分であり、社会情緒的コンピテンスとメタ認知との両方が高い場合にのみ学習意欲が高くなる可能性も予測される。本研究ではこうした学習習慣への社会情緒的コンピテンスとメタ認知の交互作用効果についても検討を試みる（目的２）。また、社会情緒的コンピテンスの習得やメタ認知の発達に差異が存在する可能性が推察される。この点の検討は生徒の学年や特徴を踏まえた学習習慣への介入や訓練を考えていく上で重要と考えられる。そこで、社会情緒的コンピテンスやメタ認知の学年間比較も行う（目的３）。

方法

参加者と手続き　クロスマーケティング社に依頼し、中学１年生から３年生、および高校１年生から３年生の合計300名を対象にWeb調査を実施した。調査では、学年と性別がある程度一定となるように募集を行った。Satisficeを検出するための項目（i.e., この質問については必ず「１：まったくあてはまらない」を選択してください：三浦・小林、2015）に不適切に回答した者63名を解析から除外した。そのため、最終的な解析対象は237名（男性116名、女性121名、平均年齢15.278歳（SD＝1.758））であった。より詳細には、中学１年生が41名（女性19名）、中学２年生が41名（女性22名）、中学３年生が37名（女性16名）、高校１年生が42名（女性21名）、高校２年生が38名（女性22名）、高校３年生が38名（女性21名）であった。手続きについては、福岡県立大学大学院人間社会学研究科研究倫理部会の承認を受けた（審査番号：22-12）。

測定尺度　社会情緒的コンピテンスについては、久保田・小池（2022）を参考に中学生用社会性と情動の学習８つの能力尺度Ⅱ（小泉・米山、2020）の基礎的社会的能力を測定する５つの下位尺度（自己への気づき、他者への気づき、自己のコントロール、対人関係、責任ある意思決定）への回答を４件法（１：あてはまらない～４：あてはまる）で求めた。メタ認知については、市原・新井（2006）で使用された９項目を用いて測定を行った（４件法：１：ほとんどあてはまらない～４：とてもあてはまる）。学習習慣については、学習習慣尺度の日常的学習習慣下位尺度への回答を５件法（１：全くしない～５：いつもする）で求めた（當山・嘉数、1998）。なお本調査では、日本語版Early Adolescent Temperament Questionnaire-Revised（EATQ-R）のEC下位尺度（中川他、2020）と学業場面に対する失敗観尺度（西村他、2017）、日本語版学習風土尺度（青島・鈴木、2022）の測定も行ったが、研究目的が異なるため、本稿では言及しない。

統計解析　統計解析にはHAD18.000を用いた（清水、2016）。本研究の解析で使用したデータはhttps://osf.io/qypn6/から利用可能である。

結果

各変数の記述統計値をTable１に示した。そして目的１の学習習慣と社会情緒的コンピテンス、メタ認知の関連について検討するために相関分析を実施した（Table２）。その結果、社会情緒的コンピテンスの全ての下位尺度、およびメタ認知と学習習慣の間に正の関連が認められた（rs＞.320, ps＜.001）。

続いて、社会情緒的コンピテンスとメタ認知から学習習慣への交互作用効果（目的２）について検討を行うために学習習慣を目的変数とした階層的重回帰分析を実施した（Table３）。Step１では、社会情緒的コンピテンスの各下位尺度とメタ認知、および性別と学年を説明変数として投入した。Step２では、上記に加えて社会情緒的コンピテンスの各下位尺度とメタ認知の交互作用項を投入した。分析の結果、社会情緒的コンピテンスの対人関係下位尺度やメタ認知それぞれから学習習慣への正の効果が認められたものの（Step２：βs＞.216, ps＜.001）、社会情緒的コンピテンスとメタ認知の交互作用は有意ではなかった（βs＜.125, ps＞.127）。

Table 1　各変数の記述統計値

	平均値	標準偏差	α係数
1　自己への気づき	2.959	0.681	.803
2　他者への気づき	3.018	0.686	.847
3　自己のコントロール	2.669	0.755	.696
4　対人関係	2.641	0.706	.763
5　意思決定	2.783	0.679	.746
6　メタ認知	2.626	0.717	.919
7　学習習慣	3.363	0.916	.849

Note: 1から5は社会情緒的コンピテンスの下位区分を示す。

Table 2　各変数間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8
1　自己への気づき	－							
2　他者への気づき	.539 **	－						
3　自己のコントロール	.314 **	.211 **	－					
4　対人関係	.481 **	.469 **	.355 **	－				
5　意思決定	.565 **	.561 **	.419 **	.485 **	－			
6　メタ認知	.510 **	.370 **	.327 **	.439 **	.554 **	－		
7　学習習慣	.428 **	.360 **	.320 **	.499 **	.500 **	.574 **	－	
8　性別	.027	.108	-.127	.089	.073	-.032	.116	－
9　学年	.027	.010	-.045	-.062	.112	.055	-.091	.061

** p <.01.

Note: 1から5は社会情緒的コンピテンスの下位区分を示す。
性別: 1=男性, 2=女性; 学年: 1=中学1年生, 2=中学2年生, 3=中学3年生, 4=高校1年生, 5=高校2年生, 6=高校3年生。

社会情緒的コンピテンスやメタ認知については学年間で発達的差異が認められる可能性を踏まえ（目的３）、社会情緒的コンピテンスの各下位尺度、およびメタ認知、学習習慣を目的変数、学年と性別、および両者の交互作用項を説明変数とした分散分析を実施した（Figure 1）。その結果、社会情緒的コンピテンスの自己のコントロール下位尺度において性別の主効果（$F(1, 225)=4.295$, $p=.037$, 偏 $\eta^2=.019$）と学年と性別の交互作用（$F(5, 225)=2.810$, p

Table 3　学習習慣を目的変数とした階層的重回帰分析

変数名	Step1 β	95%CI			Step2 β	95%CI		
自己への気づき	.031	-.100	.162		.066	-.071	.204	
他者への気づき	-.005	-.131	.122		-.010	-.140	.120	
自己のコントロール	.058	-.054	.169		.068	-.045	.181	
対人関係	.208	.086	.331	**	.216	.091	.341	**
意思決定	.159	.016	.301	*	.118	-.031	.266	
メタ認知	.372	.248	.496	**	.378	.254	.503	**
性別	.112	.012	.211	*	.113	.012	.215	*
学年	-.121	-.220	-.022	*	-.127	-.227	-.028	*
自己への気づき×メタ認知					.125	-.036	.285	
他者への気づき×メタ認知					-.075	-.232	.082	
自己のコントロール×メタ認知					.016	-.106	.138	
対人関係×メタ認知					.070	-.074	.214	
意思決定×メタ認知					-.101	-.253	.051	
ΔR^2	.451 **				.013			

** p<.01, * p<.05.

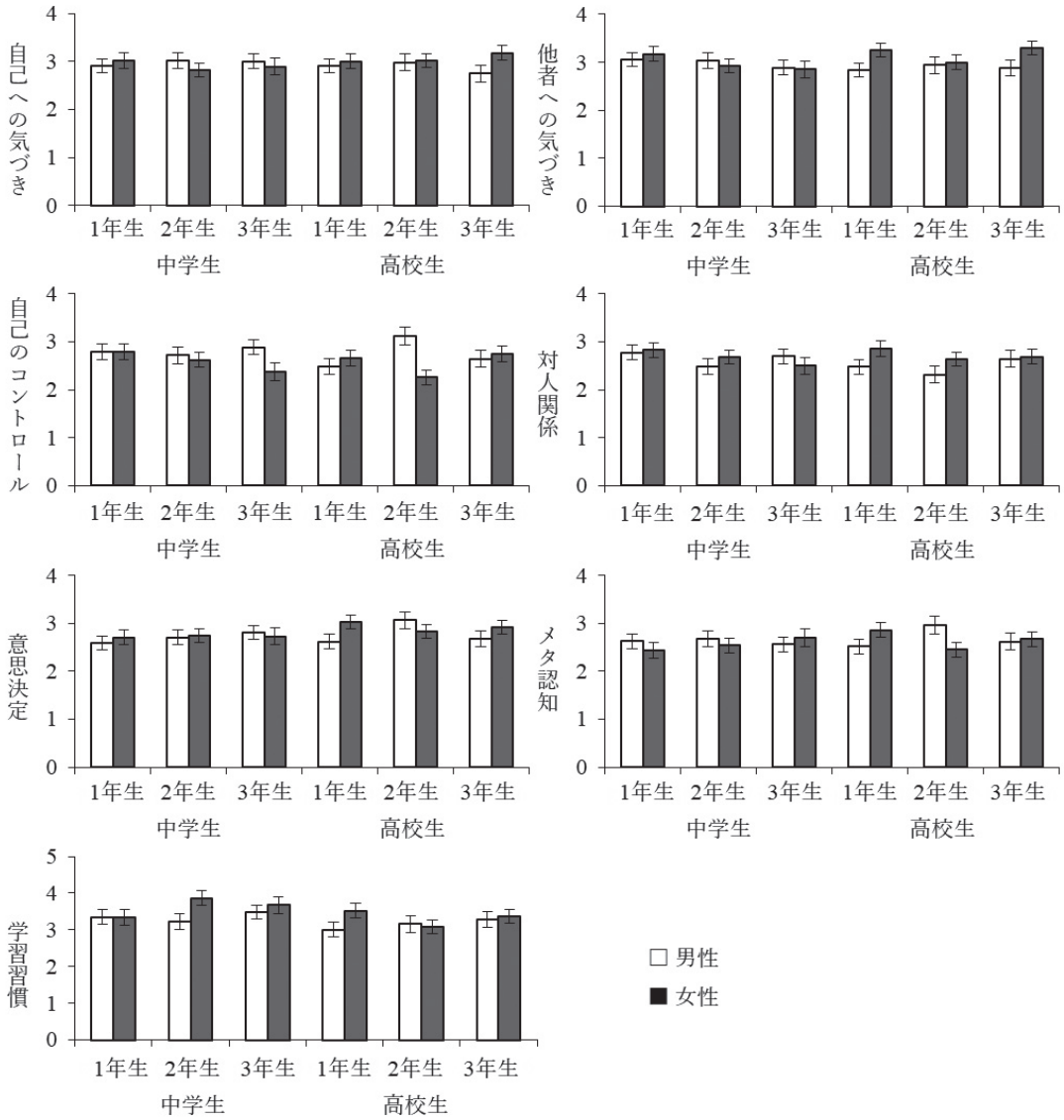
Note: 自己への気づきから意思決定は社会情緒的コンピテンスの下位区分を示す。性別: 1=男性, 2=女性; 学年: 1=中学1年生, 2=中学2年生, 3=中学3年生, 4=高校1年生, 5=高校2年生, 6=高校3年生。

＝.018, 偏 η^2＝.059）が有意であったが、この他に有意な主効果、交互作用は示されなかった（偏 η^2s < .035, ps > .146）。

考察

本研究では社会情緒的コンピテンス、およびメタ認知と学習習慣の関係性について検討を行った。目的1に関して相関分析を実施したところ、社会情緒的コンピテンスの全ての下位尺度、およびメタ認知と学習習慣の間に正の関連が認められた。こうした結果に加えて、階層的重回帰分析の結果、特に社会情緒的コンピテンスの下位区分である対人関係、およびメタ認知と学習習慣の間に関連が示された。こうした結果より生徒の学習習慣を高く保つためには、良好な対人関係を築く能力や学習内容や日常的な様々な認知活動をモニタリングし、適切な行動を選択する過程が重要であると考えられる。

社会情緒的コンピテンスやメタ認知と学習習慣の関連が示された一方で、目的2を検討するために実施した階層的重回帰分析の結果、社会情緒的コンピテンスとメタ認知から学習習慣への有意な交互作用は確認されなかった。こうした結果を踏まえると、社会情緒的コンピテンスやメタ認知それぞれが学習習慣に関わるため、



Note: 自己への気づきから意思決定は社会情緒的コンピテンスの下位区分を示す。

Figure 1　社会情緒的コンピテンス，およびメタ認知，学習習慣の学年間比較

いずれかが不十分なことがもう一方の学習習慣への効果の障害になる可能性は低いと推察される。そのため、生徒の学習習慣を高めるために介入や訓練などを試みる際には苦手な部分を解消するアプローチだけでなく、得意な側面をより伸ばすアプローチも視野に入れることができると考えられる。

目的３に関して、社会情緒的コンピテンスやメタ認知、学習習慣の学年間比較を行ったところ、有意差は確認されなかった。こうした結果

から、中学１年生から高校３年生において社会情緒的コンピテンスやメタ認知の発達的な差異は小さいことが示唆された。こうした結果には本研究の参加者が生徒に限定されていたことが関係している可能性が推察される。中学１年生から高校３年生はピアジェの認知発達理論によれば、形式的操作期に該当する（Piaget、1964 滝沢 訳 1968；Piaget & Inhelder、1966 波多野他 訳 1969）。そのため、本研究の参加者は既に一定の認知発達が進んだ状態であったと考えられ、社会情緒的コンピテンスやメタ認知に学年間の違いが認められなかったのかもしれない。今後児童も対象とした研究を実施することで、社会情緒的コンピテンスやメタ認知における発達的変化が示される可能性があるため、検討していく必要がある。また、本研究の結果はあくまで中学１年生から高校３年生を対象とした横断調査に基づくものであり、特定の参加者の追跡調査に基づくものではない点に留意が必要である。社会情緒的コンピテンスやメタ認知の発達的変化を正確に検討するには長期的な縦断調査を考慮に入れるべきだろう。

本研究の限界として横断調査であるため因果関係への言及が難しい点が指摘できる。そのため、たとえば社会情緒的コンピテンスやメタ認知と学習習慣の関連については、学習習慣が身についており、普段から学習に自発的に取り組んでいるがゆえにメタ認知が発達したり、社会情緒的コンピテンスが獲得されていたりした可能性も考えられる。こうした可能性については今後縦断調査や介入研究を行い、検証する必要がある。

謝辞

本研究は福岡県立大学附属研究所研究奨励交付金の助成を受けたものである。

引用文献

青島 拓紀・鈴木 雅之 (2022). 日本語版学習風土尺度（LCQ-J）の作成 日本教育工学会論文誌, *46*(1), 91-101. https://doi.org/10.15077/jjet.45084

浅村 亮彦 (2020). メタ認知の発達と学習活動 北海学園大学経営論集, *18*, 47-60.

Benesse教育研究開発センター (2014). 高大接続に関する 調 査 Retrieved from https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=4338 (2023年６月10日)

遠藤 志乃・中谷 素之 (2017). 中学生における動機づけ調整方略と達成目標および学習習慣との関連 心理学研 究 , *88*(2), 170-176. https://doi.org/10.4992/jjpsy.88.15328

遠藤 利彦 (2017).「非認知」なるものの発達と教育 その可能性と陥穽を探る 遠藤 利彦 (編) 平成27年度国立教育政策研究所プロジェクト研究報告書 非認知的（社会情緒的）能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書 (pp. 15-27).

市原 学・新井 邦二郎 (2006). 数学学習場面における動機づけモデルの検討 メタ認知の調整効果 教育心理学研 究 , *54*(2), 199-210. https://doi.org/10.5926/jjep1953.54.2_199

小泉 令三 (2011). 社会性と情動の学習（SEL-8S）の導入と実践 ミネルヴァ書房

小泉 令三・米山 祥平 (2020). 中学生用社会性と情動の学習８つの能力尺度Ⅱ（SEL-8JHS尺度Ⅱ）の作成 九州地区国立大学教育系・文系研究論文集, *6*, 1-10.

久保田 愛子・小池 にじ穂 (2022). 児童期後期における

社会情緒的コンピテンスと自尊感情との関連― 友人関係を媒介要因として― 感情心理学研究, *29*(1), 1-8. https://doi.org/10.4092/jsre.29.1_1

三浦 麻子・小林 哲郎 (2015). オンライン調査モニタのSatisficeに関する実験的研究　社会心理学研究, *31*, 1–12. https://doi.org/10.14966/jssp.31.1_1

中川 敦子・鋤柄 増根・松木 太郎・古田 美佳 (2020). 前青年期における気質測定尺度 (Early Adolescent Temperament Questionnaire-Revised) の、親子評定間の比較を含む基礎研究 小児保健研究, *79*(6), 545-553.

西村 多久磨・瀬尾 美紀子・植阪 友理・田中 瑛津子・市川 伸一 (2017). 学業場面に対する失敗観尺度の作成 教育心理学研究, *65*(2), 197-210. https://doi.org/10.5926/jjep.65.197

岡本 真彦 (2008). 数学的問題解決におけるメタ認知 三宮 真智子 (編) メタ認知 学習力を支える高次認知機能 (pp.111-129). 北大路書房

Piaget, J. (1964). Six études de psychologie. Gonthier.(ピアジェ, J. 滝沢 武久 (訳) (1968). 思考の心理学 みすず書房)

Piaget, J., & Inhelder, B. (1966). La psychologie de l'enfant. Universitaires de France. (ピアジェ, J.・イネルデ, B. 波多野 完治・須賀 哲夫・周郷 博 (訳) (1969). 新しい児童心理学白水社)

三宮 真智子 (2008). メタ認知研究の背景と意義 三宮 真智子 (編) メタ認知 学習力を支える高次認知機能 (pp.1-16). 北大路書房

清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD：機能の紹介と統計学習・教育、研究実践における利用方法の提案　メディア・情報・コミュニケーション研究, *1*, 59-73.

杉村 健 (1988). 小学生の学業成績と家庭における学習習慣の関係 奈良教育大学教育研究所紀要, *24*, 29-36.

當山 りえ・嘉数 朝子 (1998). 高校生の学習統制感, 原因帰属および学習習慣の発達的研究 琉球大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, *6*, 109-118.

上淵 寿 (2008). 学習における動機づけとメタ認知 三宮 真智子 (編) メタ認知 学習力を支える高次認知機能 (pp.75-96). 北大路書房